

表一 新富士火山の活動期（宮地・小山，2001 を一部修正）

ステージ	年代（年前）	噴火場所	主要な噴出物の種類・規模
V	約2200年前以降	側噴火	小規模降下火砕物+火砕流+溶岩
IV	2200～3200	山頂噴火	大～中規模降下火砕物+火砕流
III	3200～4500	側噴火+山頂噴火	中規模溶岩+小規模降下火砕物
II	4500～8000	山頂噴火	小規模降下火砕物
I	8000～11000	側噴火+山頂噴火	大規模溶岩

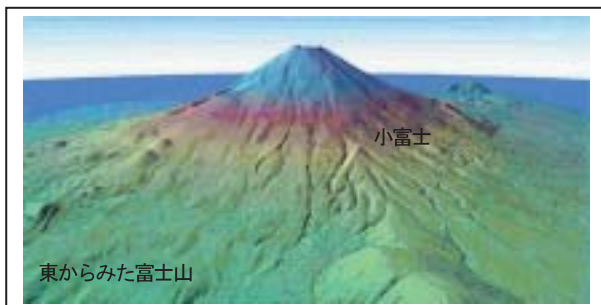
各ステージの解説

- I 11000～8000年前に山頂及び側火口から非常に大量の溶岩が噴出し、東麓を除くほぼ全域に流下した。三島溶岩や猿橋溶岩は、この時期のものである。
- II 8000～4500年前には、小規模な噴火を繰り返し山麓に細粒のテフラが堆積した。
- III 4500～3200年前には、側火山からの火山活動が活発になり、側火山及び山頂火口から多量の溶岩が流出した。
- IV 3200～2200年前には、山頂火口から中～大規模のプリーニ式噴火が頻繁に起こり、粗粒で厚いテフラが堆積し、火砕流の発生や溶岩流出も見られた。2600～2900年前頃には東斜面で大規模な山体崩壊が発生し、現在の御殿場市方向へ岩屑なだれが流下し堆積したと考えられる（御殿場岩屑なだれ堆積地）。また、この岩屑なだれは河川に流入し、下流側では長期間にわたり二次泥流が発生した（御殿場泥流）。
- V 2200年前以降になると、南東～南斜面と北西斜面を中心に多数の側火山が噴火し、ストロンボリ式～準プリーニ式噴火によりテフラと溶岩流が噴出し、一部では火砕流も発生したと考えられる。特に800～1100年頃には側噴火が断続的に続き、多数の側火山が形成された。1707（宝永4）年には山頂に近い南東山腹で大規模なプリーニ式噴火がおき、宝永火口が形成された。この噴火を最後に、現在まで富士山では噴火が休止している。

4. 富士山の地形概要

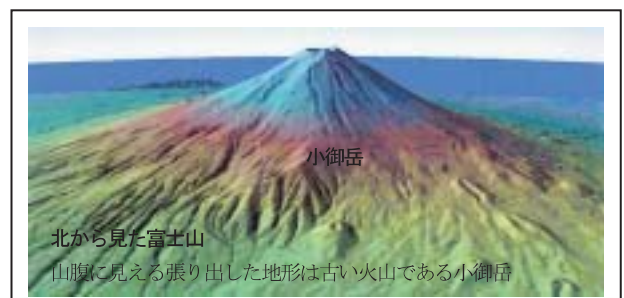
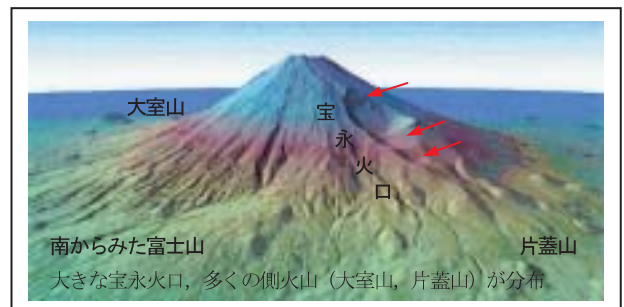
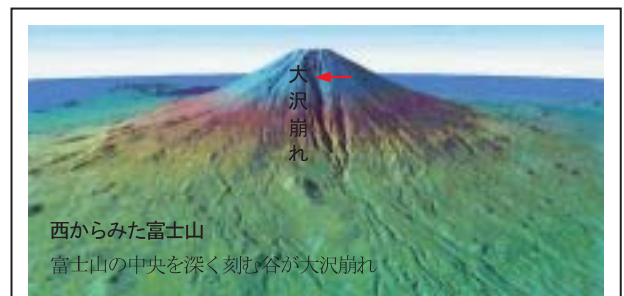
富士山は、静岡県と山梨県にまたがる、日本の陸上で最大の火山である。安山岩質の成層火山が多い日本列島ではやや珍しい玄武岩質の噴出物からなる成層火山で、山体はほぼ円錐形、全体としては山頂を中心として北北西～南南東方向に長軸をもった楕円錐形であり、頂上付近ほど傾斜が急となっている。

図一5は、富士山を東西南北から見たもので、成層火山の特徴を把握できる。北側山腹には小御岳火山が、新しい富士山の噴出物に埋め残された形で斜面から突き出しているのが確認できる。図一6は、富士山周辺の主な地形を示した地形概念図であり、地形の分布状況を把握できる。主な地形の特徴や分布は以下のとおりである。



図一5 東西南北からみた富士山

（数値地図10mメッシュ（火山標高）データを「カシミール3D」を用いて地形を立体表現



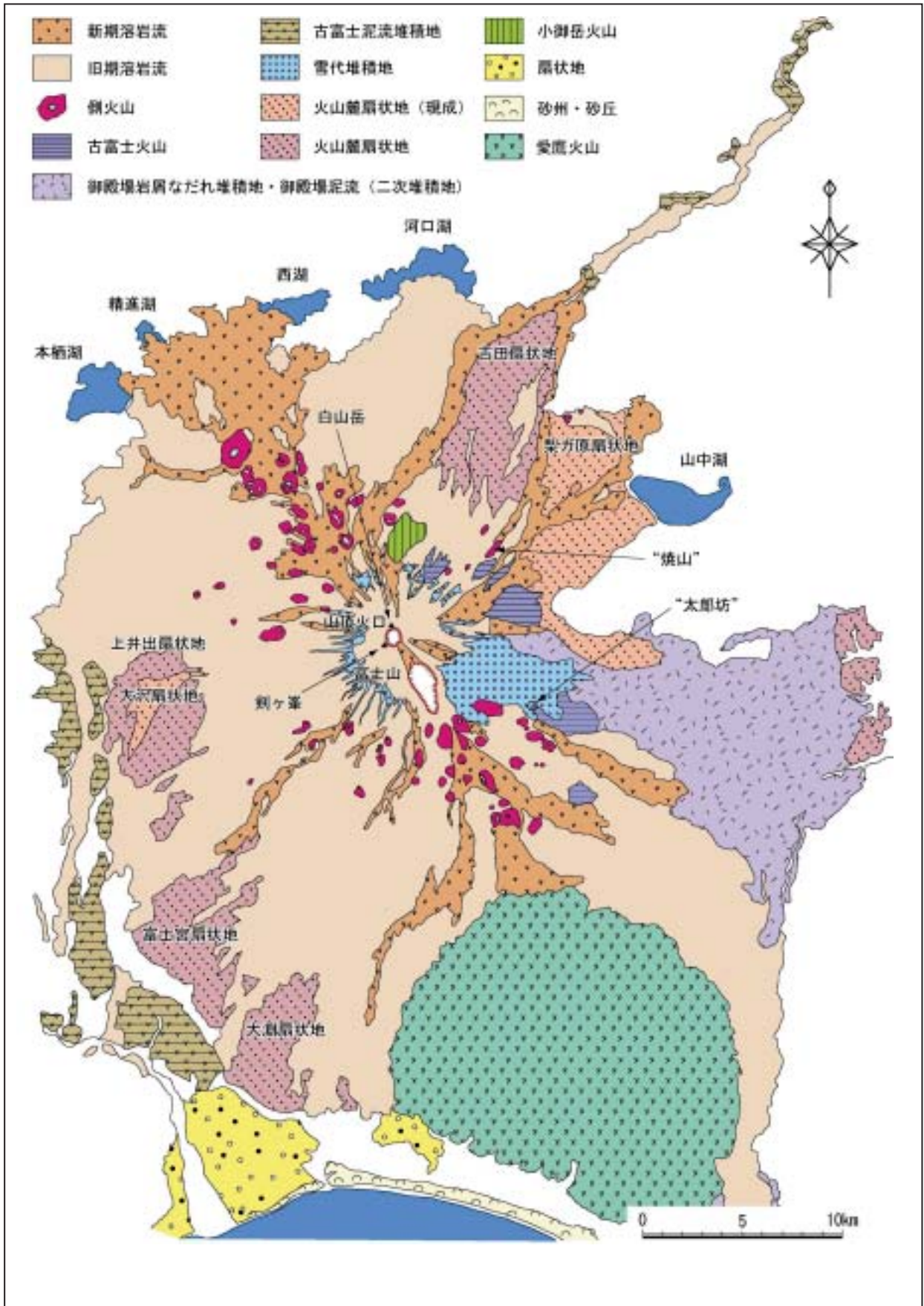


图-6 富士山地形概念图